北条氏の活躍した中世福岡の歴史の足跡を辿る

２０２２年ＮＨＫの大河ドラマ「鎌倉殿の13人」は、
北条義時が主人公です。
鎌倉幕府といえば源頼朝が開いた武家政権ですが、
その幕府の実権を握っていたといわれるのが北条氏一族です。
源頼朝によって、戦乱の世に終わりが来たかのように思われましたが、その頼朝が急死。
跡を継いだ源家の独裁政治を防ぐために、
北条義時たちによって考えだされたのが「13人の合議制」でした。
大河ドラマでは、日本の歴史の中でも初めてと言われる
合議制に焦点をあてた物語が展開されます。
今回のグッドライフの特集では、大河ドラマに因んで
北条氏と九州・福岡の関わりを巡ってみました。

参考文献
『中世都市・博多を掘る』発行所：有限会社 海鳥社

「蒙古襲来絵詞（模本）」（九州大学附属図書館所蔵）

福岡の都市としての発展は鎌倉時代から始まっていた―

中世福岡に大きな影響を与えた蒙古襲来

伊豆国出身の豪商・北条一族は、鎌倉時代に将軍の後見役などを務めた執権職を代々世襲しながら活躍しました。その北条氏の働きの足跡は、中世の九州福岡にも影響を残しました。関東の一大勢力であった北条氏が九州と関わるきっかけとなったのが、日本史に残る戦い「蒙古襲来」です。

元のフビライ・ハンがアジア全域への勢力拡大に意欲を燃やし、元と高麗の軍を引き連れて九州北部に二度の侵略を試みました。それが、蒙古襲来の「文永の役」と「弘安の役」です。当時の様子を描いた「蒙古襲来絵詞」には、志賀海神社や筥崎宮から生の松原までの旧蹟が描かれ、博多湾沿岸一帯が戦場として苦戦を余儀なくされた史実も残されています。文永の役後、鎌倉幕府は未曾有の国難に備えるために、異国警固の体制整備に着手しました。そのひとつとして日本への侵攻を防ぐための石築地、いわゆる元寇防塁の構築を行いました。さらに「鎮西探題（ちんぜいたんだい）」を設置しました。この鎮西探題とは、鎌倉幕府の出先機関のような役割りの場で、九州の武士を統率し、訴訟の裁決や軍事指揮統制が行われました。

鎮西探題が設置される前は、九州にいる武士が訴訟のために、鎌倉や京都六波羅に赴いていましたが、ここで済ませられることによって、異国警固に専念できるようになったのです。この時、幕府から赴任を命じられたのが北条氏一門。これによって、西国における北条氏の統制力の強化が図られました。

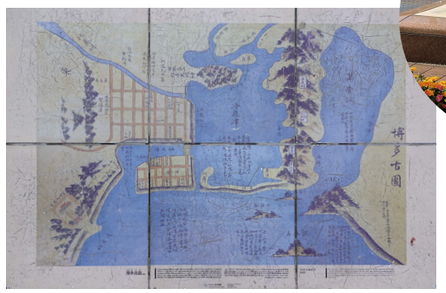
蒙古襲来から日本を守った防塁の跡形は、福岡各所に残っている。写真は総延長20kmといわれる元寇防塁の真ん中ぐらいに残る西新元寇防塁。

政治、文化の賑わいを生んだ鎮西探題

鎌倉時代の末期の古文書「博多日記」の記述などから、鎮西探題が設置されていたのは、現在の櫛田神社あたりと推測されています。この鎮西探題の設置を機に、これまで九州を統治する機関が太宰府から博多に移り、福岡の街の風景が大きく変わっていきます。鎌倉幕府の本拠地である鎌倉のまちを手本とした本格的な城郭都市づくりが進められたことで、現在の福岡市が九州の中枢都市として発展していく足がかりとなったようです。その影響は、政治だけではありませんでした。当時発刊された和歌集の中には、多くの鎮西探題関係者の歌が残されていて、文化の繁栄をもたらしていたことが伺えます。

博多古図

中世鎌倉時代の博多を描いたといわれる古図。聖福寺の西門があった場所として名付けられた西門（さいもん）通りの歴史の散歩道に設置されている。

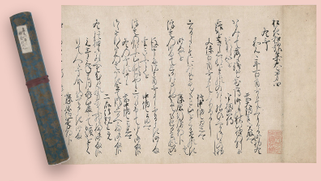


鎌倉になぞらえてつくられた中世博多の町割り

豊臣秀吉が博多で行った太閤町割りよりも前の鎌倉時代から、博多の都市としての発展は実は始まっていました。聖福寺伽藍の並びから、西へとまっすぐ通る道に残っている道に今も鎮西探題時代のまちづくりの名残が見られます。

鎮西探題の武家歌人 北条英時

鎌倉時代に編まれた『臨永和歌集』や『松花和歌集』には、鎮西探題に関わる人々の歌が残されています。特に、最後の鎮西探題の任を受けた北条英時は優れた武家歌人として二条派で活躍。鎮西探題の英時を中心とした歌壇が形成された様子が伺えます。



『日本古典籍データセット』（国文研等所蔵）